



木陰の散歩道に入ると、セミの音がしきりに降りかかる「蝉しぐれ」だ。「しぐれ」は「時雨」とも書き、一般に晩秋から初冬にかけての「にわか雨」を指す。夏のにわか雨も「しぐれ」の語感が漂う。気象用語にはないが「夏しぐれ」と呼びたい。

この「夏しぐれ」、強い日射で地面が熱せられて上昇気流が生まれると、空気が膨張し、水蒸気が凝結して雲粒となり、成長して雨となる。入道雲（積乱雲）の置き土産で午後には起きやすい。掲載の写真、まるでカーテンのように雨が降っているが、隣では晴れている。古来、にわ

2015. 8. 23



「気象コンパス」主宰

古川 武彦

### 「夏しぐれ」

か雨は「馬の背を分ける」といわれるほど局地的で、広がりもせいぜい数キロ、1時間もすれば止む。あちこちで発生するが、どこで起きるかの予測は難しい。

今日は二十四節気の「処暑」、暑さがおさまるという意味だが、水戸での日の出は午前5時2分、入りは午後6時20分だから、まだ1時間以上昼間の方が長い。本来、地表の温度は、降り注ぐ日射による加熱と、地表の熱が赤外線として上空に逃げて行く冷却の割合で決まる。これからは日脚も短くなり、「夏しぐれ」を起こすパワーも落ちていくので、回数も減る。残暑を経ながら夏は去ってゆく。

1週間ほどで「二百十日」、いよいよ台風が接近・上陸する時節だ。台風に伴う積乱雲は、「夏しぐれ」では到底済まない。備えを怠りなく。

(元気象庁予報課長、理学博士、鹿嶋市在住)



9月1日は「二百十日」、立春から数えて210日目である。台風が襲来しやすい厄日だと思われているが、過去の統計をみると、むしろ襲来が少ない日に属しており、台風シーズンに備える警鐘と解すべきだろう。

台風15号は九州を縦断した後、日本海を北上した。台風は「ひまわり」で見ると、直径が500キロ以上に及ぶ左巻きの巨大な渦で目を持つ。台風の移動は、川面に浮かぶ渦が流れに乗って動く様子と似ており、大気の川にあたるのは「小笠原高気圧」の縁辺を吹く風だ。この高気

2015. 8. 30



「気象コンパス」主宰

古川 武彦

### 二百十日

庄、夏季に北太平洋上を東西に帯のように存在し、その西端が小笠原地方に張り出したもの。

小笠原高気圧の南側は偏東風と呼ばれる東寄りの風、北側は偏西風と呼ばれる西寄りの風が吹いているので、台風は発生後、西に進み、やがて北に向きを変え、さらに北東に進路を変える放物線を描く。台風が北東に向きを変えることを「転向」と呼ぶ。台風15号では日本付近の偏西風が非常に弱かったため、転向がより北になり日本列島を大回りした。

今後は偏西風も南下し、台風が関東地方に襲来する可能性も高くなる。関東地方の西を進む場合は強い南西風と大雨に見舞われる。一方、房総半島の東を北に抜ける場合は、北東の強風が吹く。「二百十日」を機に、実った稲が無事収穫されることを祈ると共に、台風にも備えたい。

(元気象庁予報課長、理学博士、鹿嶋市在住)